

農村における「地域コミュニティ」の形成

—学習活動を通じた連帯意識の醸成に着目して—

柳澤 美奈*

1. 研究の目的

本研究では、現代農村において目指されるべき地域コミュニティのあり方について検討し、それが学習活動を通じてどのように形成されるのか、また、その過程で内部にどのように連帯意識が醸成されていくのかを明らかにすることで、農村において地域の連帯を作るための示唆を得ることを目的とする。

2. 構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 本研究の目的

第2節 問題の所在

第3節 論文の構成

第4節 用語の定義

第1章 農村における地域社会の変動

第1節 近代化と農村の地域社会

第2節 戦後の農村社会の変容

第2章 現代農村が抱える課題と「地域コミュニティ」形成の必要性

第1節 現代農村が抱える課題

第2節 「地域コミュニティ」形成に向けて

第3章 「地域コミュニティ」形成のための学習活動の展開

第1節 「地域コミュニティ」形成と学習活動

第2節 学習活動の展開

第3節 多様な学習活動の先に見える「地域コミュニティ」

第4章 現代農村における「地域コミュニティ」形成

第1節 由利本荘市一集落の直売所活動と「地域コミュニティ」形成

第2節 現代農村における「地域コミュニティ」形成

終章 本研究のまとめと考察

3. 概要

第1章では、日本の近代化から戦後の高度経済成長期に至る日本農村の地域社会の変容を概観することで、農民の生活様式の変化と農民意識の変化を明らかにした。戦前、農村は生産と生活の基盤であり、日常生活のあらゆる場面で集落内の相互扶助や共同労働がみられ、内部には重層的で永続的な人間関係が築かれており、血縁・地縁の強い結びつきが存在した。そしてそれは、伝統的共同体の解体が迫られ、農村の近代化がすすめられようとしていた時代に、農村地域での自主的な学習運動を展開させる素地となったことを指摘した。

第2章では、農村社会の変動をふまえて、現代農村をとりまく様々な問題を、過疎化と少子高齢化、産業の衰退、地域の連帯の喪失という3つの視点から検討した。そして地域の連帯が喪失し、地域社会が脆弱化している今日の農村では、伝統的共同体とも都市型コミュニティとも異なる、連帯意識でつながる「地域コミュニティ」の形成が必要であることを示し、目指されるべき「地域コミュニティ」の特質として、①地域の資源を有効に活用すること②緩い紐帯でつながり、外部に対し開かれていること③地域にとっての「豊かさ」を共有していることの3点を挙げた。

第3章では、「地域コミュニティ」の形成には、学習に基づく実践活動が必要であり、それは生活要求の学習課題化、問題の本質理解、解決策の思索、実践という過程をたどることを示した。そのうえで、主体的な学習活動を通してつながりを生かした地域づくりが行われている福島県飯舘村と長野県喬木村の社会教育の実践から考

* 筑波大学 人間学群 4年

察を深めた。そこでは、住民自身が生活課題を顕在化させ課題の共有を図り、互いにエンパワーメントし合いながら行動につなげていく過程に学習が位置づいており、その過程で連帯意識が醸成され、重層的な住民の結びつきが存在していることが明らかとなった。

第4章では、筆者が集落支援員として調査している秋田県由利本荘市の一集落における直売所の活動を事例としてとりあげた。その活動の課題である後継者の確保は、農村地域における世代間の意識の相違が原因であることを指摘したうえで、今日、農村において、「地域コミュニティ」を形成するためには多様な学習活動と実践を地域全体に広げることが必要であることを述べた。そして、農村における課題として、学習を通して、住民が相互に関心を持ち、あらためて地域の伝統やつながりといった資源を見直

し、評価することによって住民相互の意識を変革していく必要があることを指摘した。

終章では、本研究の成果についてまとめ、「地域コミュニティ」を形成するためには、住民の主体的な学習活動を充実させる計画やそれを指導するコーディネーターについての研究が必要であることを述べ、今後の課題とした。

4. 主要参考文献

- 福武直『日本の農村』東京大学出版会、1971年
広井良典『コミュニティを問い直す一つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書、2009年。
島田修一・辻浩編『自治体の自立と社会教育—住民と職員の学びが拓くもの—』ミネルヴァ書房、2008年。